

Title	喜劇的社会小説の試み：『リチャード・フェヴァレルの試練』
Sub Title	An experiment of comic social novel : the ordeal of Richard Feverel
Author	滝口, 達也(Takiguti, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.66, (1994. 7) ,p.74(105)- 87(92)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

喜劇的社会小説の試み： 『リチャード・フェヴァレルの試練』

滝口達也

I

1851年の The Great Exhibition に象徴されるような中期ヴィクトリア朝の経済繁栄の陰には、Henry Mayhew が報告したような底辺の人々の生活がある。しかし、1848年のチャーティズム運動挫折にいたるまでの激しい動揺とは対照的に、表面上は社会的楽観論がこの時代を支配した。Louis Cazamian は、主としてヴィクトリア朝初期の社会問題を扱った Dickens, Disraeli, Gaskell, Kingsley などの小説を ‘social novel’ と定義してその歴史的使命を分析したが、1850年を一応の時代の区切りとしている¹⁾。

George Meredith は1851年に第一詩集 *Poems* を出版する。その巻頭の詩 ‘The Olive Branch’ では、科学がもたらした平和と繁栄の新時代を歓迎している。同じ年には、Leigh Hunt や John Stuart Mill の影響下にある定期刊行物 *The Leader* (男性普通選挙権、初等義務教育、教会改革、自由貿易などを標榜するチャーティストとラディカルの雑誌) と関係するようになり、この雑誌を通じて、チャーティストの G. J. Holyoake や、Christian Socialist の主導者 Charles Kingsley を知るようになる²⁾。そして私生活では、後に *Modern Love* に描かれるような結婚生活の破局を経て、1859年に *The Ordeal of Richard Feverel* を出版するに至る。

The Ordeal of Richard Feverel の時代設定は、小説の中では明記されていない。しかし、小説に書き込まれた時事問題や小説内の時間の経過から見て、概ね1820年代末から1830年代中頃までと考えられる³⁾。例えば、

五年間の洋行生活から帰国した Austin Wentworth に、Adrian は ‘The free Briton is to receive Liberty’s pearl, the Ballot.’⁴⁾と近況報告するが、これは1832年の第一次選挙法改正法案の可決についての言及であろう。また、第四章の放火事件では麦藁の山に火がつけられるが、これは1830年代の自由貿易論争を連想させる。この論争で損害を受けた零細農業労働者による暴動は、*Alton Locke* にも描かれているように、Sir Robert Peel が穀物条例を廃止する1846年前後まで続いた。それ故、この放火事件は、自由貿易論者の独立自営農民 (free-trade farmer) Blaize に対する日雇い農夫の仕業と思われて当然の事件であっただけに、Richard と Ripton の復讐は子供の仕業とはいえ悪質な悪戯ということになる。

また、この小説では進化論も取り上げられている。*The Origin of Species* の出版は、*The Ordeal of Richard Feverel* と同年であるが、前者は十一月、後者は六月であるから Darwin の著書から直接の影響は受けていない。しかし、進化論の思想は少なくとも Charles Lyell の *The Principles of Geology* (1830-3) や、Robert Chambers の *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844) に遡ることができる。特に後者の書物は、人間が猿と共通の祖先を持っていることを示唆したものであるから、‘I an animal!’ (94) という Richard の驚嘆はこの段階の進化論に基いていると言えよう。

こういった同時代の政治社会の思想は、Meredith の作品においてはどのように描写されているだろうか。*The Ordeal of Richard Feverel* を、ヴィクトリア朝初期の社会小説と比較するなら、小説の題材として議会報告や政府の青書、新聞雑誌の調査記事、あるいは著者の見聞によるルポルタージュなどはいずれも使われておらず、時事問題にせよ、間接的に言及されるだけである。また、状況描写は非常に抽象化され、社会小説の本来持つべき読者の感情に訴える直接的効果を損なっている。しかし、社会問題を小説化する際に個人的な人間関係の中で追及していく方法や、描写される問題に応じて、写實的叙述、メロドラマ、悲劇、家庭劇といった様々なレトリックが使用されるといった点では、Meredith の作品にも共通す

る。Meredith が ‘an experiment’⁵⁾と手紙に書くこの小説では、どのような方法によって、どのような歴史的現実が描かれているだろうか。以下、Sur Austin, Adrian, Richard といった人物の描写における ‘narrative tone’ の相違に留意しながら、そこで扱われている社会問題と、それに対する Meredith の批判がどのようになされているかを吟味してみよう。

II

The Ordeal of Richard Feverel は、教育問題を題材にした喜劇的小説である。Sir Austin は ‘System’ と呼ばれる教育論によって Richard を育てるが、その背後には、階級の保存という意識が強く働いている。Lord Heddon や Doctor Bairam と医学的見地から若い頃の放蕩が人間の身体にどのような影響を及ぼすかといった議論をするのも、Sir Austin の念頭にあるのは、貴族としての血統をいかに保つかといった問題である。ここでは Richard の結婚問題は、馬の血統と同じレベルで語られている⁶⁾。Richard と Lucy の結婚が受け入れられない理由も、宗教の違いより、貴族と農民の姪という階級の違いにある。こういった強烈な階級意識は、逆に社会的秩序の崩壊に対する貴族階級の動揺を示している。Feverel 家には女中と結婚した Richard の従兄弟 Austin Wentworth がいるが、こういったスキャンダルには賛否両論あることが示されている。

また「システム」には、不貞の妻に対する私生活上の怨恨を社会一般に向けてはらそうという意識も働いている。そのため性に対する道徳教育としての側面が強調され、人間をアダムとイヴの墮落以前の状態に戻すという極端な社会改革の思想となる。Sir Austin が出版する小冊子 ‘Proposal for a New System of Education of our British Youth’ は、青少年の道徳教育に関する論文であることが暗示されている。Meredith は、Sir Austin の心理を喜劇的に誇張することによって、‘Scientific Humanist’ (479) の本性を暴露している。

しかし「システム」による教育が失敗に終わるのは、その科学的合理性のためである。父子の断絶は、Richard が女性を賛える自作の詩の焼却を

命じられたときに端を発し、Lucy との恋愛で決定的になる。必然的に、この父子の関係は Science と Nature の相克という形を取ることであり、ヴィクトリア朝初期の社会小説が取り組んだ問題、すなわち、功利主義に対するロマン主義の挑戦、ないしは mind に対する feeling の抵抗といった図式を鮮明にさせる。Sir Austin は明らかに Benthamite のパロディである。

科学的合理性に対する Meredith の批判は、次のような点にある。まず第一に、Sir Austin はシステムによる教育の失敗を息子に責任転嫁するが、それに対する語り手のコメント、'If, instead of saying, Base no system on a human being, he [Sir Austin] had said, Never experimentalize with one, he would have been nearer the truth of his own case.'(344)に見られるように、実験を主とする科学的方法を人間に応用することを拒否する点にある。しかしながら、さらに重要なことは、次のような Sir Austin の発言に対して向けられた批判にある。

I believe very little in the fortune, or misfortune, to which men attribute their successes and reverses. They are useful impersonations to novelists ; but my opinion is sufficiently high of flesh and blood to believe that we make our own history without intervention. (344)

Sir Austin は、超自然的力に対する不信の念を表明することによって、人間の運命からの独立を説いているが、こういった考えの背景には進化論がある。進化論は、「自然は必ず時間的に先行されたものに原因づけられた結果のみを生む」という natural causality (自然的因果性) を証明した。Tess Cosslett が分析するように、この時代の進歩人はこの natural causality を、自然現象だけでなく人間の行為をも説明する 'fixed law' と解釈し、超自然的な 'arbitrary will' を否定した⁷⁾。Sir Austin は苦境に陥りつつある息子に救いの手を差し伸べようとせず、'Consequences are the

natural offspring of acts.’ (351) と言う。この Sir Austin の表現で、natural causality の用語 cause/effect は、そのまま人間行為の説明に転用され、act/consequence の関係に置き換えられているのは注目に価する。語り手は、Sir Austin に対して、‘How are we to know when we are at the head and fountain of the fates of them we love?’ (345) とコメントするが、この時、運命を信じない Sir Austin がいかに他者の運命を左右する立場にあったか、読者はやがて全知の語り手とともに知ることになるのである。

その一方で、Richard の結婚は、love という本能によって科学を打ち破ったはずであったのに、この小説にハッピー・エンディングをもたらさないまま、小説の最も重要な第三の劇の幕が開く。第三部にはいると、Sir Austin は、結婚の事後承諾を求める Richard をロンドンに待たせたまま何の意思表示もせず、この状態が数ヶ月に亘るという奇妙なプロットがある。この場面で Sir Austin がとった行動は、‘Only be quiet: do nothing: resolutely do nothing’ (345) である。これは、一見「システム」の影響から逃れたかに見える Richard に、「システム」は新たに *laissez-faire* という手段で影響を及ぼしていることを示すための操作と理解できる。進化論の根底にある自然淘汰説は、言うまでもなく自由放任主義の裏付けとなっている。転落の道をたどる Richard に対して、Sir Austin は何の手段も講じようとしませんが、これに対して、‘Science is notoriously of slow movement.’ (480) という語り手の短いコメントは、Mrs. Berry に代表される科学など念頭にない女性からの批判を代弁している。

結局、この ‘Scientific Humanist’ の誤謬は現実を直視していないという点に集約されていく。Sir Austin は、自ら ‘a phantasmal vapour distorting the image of the life we live’ (351) と定義している ‘sentiment’ に陥っているというアイロニーに気付かない。

He was capable of that great-mindedness, and could snatch at times very luminous glances at the broad reflector which the world

of fact lying outside our narrow compass holds up for us to see ourselves in when we will. Unhappily, the faculty of laughter, which is due to this gift, was denied him. (194)

この 'reflector' には、決して他者の現実には映らないであろう。そして、こういった合理的知性の陥る自己欺瞞の姿は、笑う能力の欠如に象徴されている。つまり、Meredith の sentimentalism 批判は、抽象的なモラルに養われた知識人に向けられているのであり、Dickens に代表されるような 'sentimental interventionism' を否定しているのではなく、むしろベンサム派功利主義批判においては同じ土俵に立っていると言ってよい。経済学であれ政治学であれ、合理的人間解釈によって体系化されたものが提出する政策や社会改革案に危機感を抱いたという点で、Meredith はヴィクトリア朝初期の作家と共通している。

III

この小説を社会的政治的文脈から読みほぐすと、Richard に二人の従兄弟、Adrian Harley と Austin Wentworth がいるのは偶然ではないことが理解される。彼等は、Sir Austin を頂点とする世界の中で二つの方向を指し示している。

Adrian は、この小説において Sir Austin と並ぶ知的エリートであるが、Meredith は Adrian に Sir Austin にはない 'the faculty of laughter' を与え、語り手に次ぐ commentator として機能させている。Adrian の 'contemplative mind' (328) と 'creditable disinterestedness' (321) といった特性は、Mohammad Shaheen が分析するように、他の人物の試練からこの小説が comic distance をとることを可能にしている⁸⁾。Adrian の喜劇的 commentator としての役割は、第一部 'Bakewell Comedy' において顕著である。窮地を脱するために子供じみた計略に駆け回る Richard と Ripton に対する Adrian のコメントは次のようなものである。

'Boys are like monkeys, the gravest actors of farcical nonsense that the world possesses. May I never be where there are no boys ! A couple of boys left to themselves will furnish richer fun than any troop of trained comedians. No : no Art arrives at the artlessness of nature in matters of comedy. You can't simulate the ape. Your antics are dull. They haven't the charming inconsequence of the natural animal'. (47)

Adrian は、Meredith の描いた喜劇的人物の中でも特異な存在である。

The Ordeal of Richard Feverel では、政治への言及はすべてこの Adrian によって冷笑的に語られる。Adrian は、Austin Wentworth や女性解放論者 Lady Judith を 'Radical' と定義し、また、Lady Blandish への手紙の中で、墮落した貴族階級と貴族びいきの国民性を賛え、'democrat' を嫌悪し、自らを 'conservative' と呼ぶ。そして、その理由として次のような政治信条をもらしている。

I see, too, the admirable wisdom of our system :—could there be a finer balance of power than in a community where men intellectually nil, have lawful vantage and a gold-lace hat on ? How soothing it is to intellect—that noble rebel, as the Pilgrim has it—to stand, and bow, and know itself superior ! This exquisite compensation maintains the balance : whereas that period anticipated by the Pilgrim, when science shall have produced an *intellectual aristocracy*, is indeed horrible to contemplate. For what despotism is so black as one the mind cannot challenge ? 'Twill be an iron Age. (377)

この伝統的制度に対するアイロニカルな礼賛には自嘲的な調子が濃厚であるが、引用の後半部分では、知性を武器にした社会的反逆者であるはずの

Adrian でさえ、Sir Austin のような知的貴族の支配する社会の出現を恐れている。結果的に、Adrian はある種の ‘gradualism’ の立場をとる。それは、‘We’re in a tangle. . . . Time will extricate us, I presume, or what is the venerable signor good for?’ (501) という Austin Wentworth への反論にも表われており、ここでもまた、進化論の影響を見ることができる。

ところで、こういった喜劇的人生観や政治信条を持つ Adrian は、また同時に ‘epicure’ (快楽主義者／美食家) という性格を与えられている。食事の描写は Adrian にとどまらず、胃弱 (dyspepsia) の Hippias のエピソード、少年時代の Richard と Ripton のエピソード、十八世紀生まれの健啖家 Great Aunt Grantley と過剰ぎみである。Meredith の作品において ‘appetite’ が誇張されるのは、John Goode の指摘にもあるように、自己保存 (self-preservation) という本能的エゴイズムに対する風刺であるが、このエゴイズムは必ずしも否定されているのではない⁹⁾。しかし、Adrian は、‘To satisfy his appetites without rashly staking his character, was the wise youth’s problem for life.’ (8) と語り手からからかわれる。また、彼の Epicureanism は、‘He must recline on Mammon’s imperial cushions in order to moralize becomingly on the ancient world.’ (323) や、‘He was a disposer of men: he was polished, luxurious, and happy—at their cost.’ (9) というように、金銭のレヴェルから繰り返し風刺される。つまり、Adrian は、実際には功利主義的哲学を代弁しているにすぎない。ベンサミズムの自由主義思想は「快楽の探究と苦痛への恐れ」という人間行動の動機を出発点にし、‘pleasure’を量的に計量する幸福概念に基いて成立しているが、まさに Adrian がそれに当てはまる。Adrian の観照的な人生観が、金銭的制約を逃れた上での自己満足に過ぎないことは、Adrian が Peter Brayder と同様、社会的身分として ‘parasite’ であることに象徴的に示されている。したがって人生を喜劇として見る Adrian 的観点は、この小説で肯定されてはいない。

このことは、Adrian が Richard や Austin Wentworth と対比される

時、「変化」に対する態度の違いを意味し、それは、ロマンスに対する考え方として示されている。‘Wise youths who buy their loves’(375)の一人 Adrian はロマンスを軽蔑している。Meredithによれば、恋愛という経験によって ‘moral discipline’ を受けることがないとすれば、喜劇的精神を持っているとは言い難い¹⁰⁾。Adrian は、Ripton や Tom Bakewell のような平凡な若者が、Richard と Lucy の結婚という陰謀に荷担することにロマンスを感じ、脇役として無報酬でも Richard の従者となる心理を経験することはない。

Such is the nature of youth and its thirst for romance, that only to act as a subordinate is pleasant. When one unfurls the standard of defiance to parents and guardians, he may be sure of raising a lawless troop of adolescent ruffians, born rebels, to any moment. The beardless crew know that they have not a chance of pay ; but what of that when the rosy prospect of thwarting their elders is in view ? (249)

V. S. Pritchett は、Meredith の作品に若さや成長に対する擁護の調子があると評しているが、この語り手のコメントには、変化に対するロマン派的な擁護が見られる¹¹⁾。

Adrian は、自身を決してラディカルと定義することもなければ、‘born rebel’ として行動することもないであろう。しかし、だからといって喜劇的なバランス感覚が容認されているわけではない。Gillian Beer は、‘The self-protecting irony with which Meredith has masked his relationship to his work means that he cannot find a narrative tone for the conclusion except through the dramatic voice of Lady Blandish.’と指摘している¹²⁾。同様のことが、commentator としての Adrian にも当てはまる。Adrian は、この小説が結末に向かって悲劇的な情調を強めていくにしたがって舞台に姿を現わさなくなる。このことは、Meredith において、喜

劇点観点から社会小説を描くことの困難さを示しているのではなかろうか。

IV

「システム」を打破したのは確かに love という本能であった。William Cobbett の ‘Love is a great leveller ; a perfect Radical’¹³⁾ という定義を借りるなら、Richard はたしかにラディカルである。しかし、いみじくも Adrian が ‘the continuation of a philosophic plan’ (393) と呼んだ「システム」による教育の続編は、息子に対して神になろうとした父の樂園からの Paradise Lost の物語でさえある。それまでの人生は積み藁を焼いて結婚しただけという Richard の自己認識は、滑稽なほど痛切な事実である。Richard という ‘engine’ (452) は、競争原理の支配する社会に解き放たれて暴走する。

Richard が企てた社会改革事業が克明に描写されることはないが、それが ‘the fallen and unfortunate women’ の救済であったことは、‘penitentiary’ (売春婦更生所) (395) の設立と誤解する Mrs. Berry のエピソード、‘the regeneration of the streets of London, the profession of moral-scavenger’ (400) と冷笑する Adrian の科白などから示唆される。このあまりにナイーブな英雄的行為、漠然とした騎士的な事業の唯一の成果は、無謀な駆け落ちの結果、零落した母を保護したことよりも、Bella の苦悩を理解したことにある。退廃的な世界に生きることを余儀なくされている Bella は、Richard の感傷的な同情によって、刹那的に魂を救済されたことも事実なのである。Richard は、‘an infamous woman’ という世評に対して、Bella を ‘a lady very much misjudged and ill-used by the world’ (436) とかばう。しかし、この同情には大きな犠牲が払われねばならず、最終的には Lucy の死へと帰結する。保守的な価値観に対する安易な抵抗がどのような結末に至るかは Clare が死をもって教え、曖昧な理想主義を持つ Richard は完膚なきまで叩きのめされることになる。

チャーティスト Alton にとってのブルジョア階級や拝金主義のように、

外の世界に敵とすべき階級やイデオロギーが明確であれば、Richardの英雄の資質たるべきロマンチックな衝動も発揮すべきところを得たかもしれない。Richardの場合、‘Where, then, was his enemy. Everybody was his enemy, and everybody was nowhere!’ (446) という状況は、ここにはもはや求めるべき cause (大義名分) さえも見出せないという点で、innocentの悲劇にはちがいない。しかし、Kingsleyは、causeを求めること、それ自体誤りであったと悟る Altonを描いた。Richardにはそういった認識は訪れない。RichardのNatureに対する信仰告白といわれる有名なクライマックスでさえ、次のような心理的プロセスが必要となる。

Now that he knew the cause, the marvel ended; but now that he knew the cause, his heart was touched and made more of it. (522)

ここに示されているのは、Natureとの関係において合理性や客観性をより重視するようになった人間の姿である。つまりここには、marvel (超自然的な力) による驚嘆ではなく、cause (因果律という原因) を知った科学者としての驚嘆があるにすぎず、厳密に言うなら、‘epiphany’の意味も変化してしまっている¹⁴⁾。

Richardの行動は、無意識のうちにも、常にAustin Wentworthの後を追って来た。Tom Bakewellを流刑から救うべく獄中にまで出向いたのも、Sir AustinにLucyを受け入れさせたのも、重要な場面に立ち合うのは必ずAustin Wentworthである。Norman KelvinはAustin Wentworthを‘Christian socialist’と特定したが¹⁵⁾、彼が社会改革者として具体的に何をしているのか読者にはわからない。AustinはLucyと同じく語り手に批判されない人物であり、Meredithに理想化されているのは明らかである。しかし、Austin Wentworthは、実際にはヴィクトリア朝社会に出現していない人物である。Meredithが描いたのは、Richardというラディカリズムへの漠然とした指向性を持った青年が登場してくる時代背景と思想的土壌である。残念ながら、ここにはDisraeliのいう ‘The

Two Nations' のうちの一方, Mayhew が報告したような「もう一つの国民 (The Other Nation)」は描かれていない。Sir Austin, Adrian, Richard はそれぞれ哲学的論争, 喜劇的形式, 疑似英雄詩的・悲劇的形式の中で批判された。こういった閉塞した状態を嘆くかのごとき Sir Austin は次のように風刺されている。

'But how long will this last ? ' he demanded, with the air of Hippias. He did not reflect how long it had lasted. Indeed, his indigestion of wrath had made of him a moral Dyspepsy. (417)

怒りといった感情でさえ個人主義の名のもとに閉じ込めてしまった社会は, 経済繁栄による表面的な安定とは裏腹に, 何かが急激に変化し, 社会正義を貫くための基盤でさえ喪失した社会である。Meredith は, 初期ヴィクトリア朝の社会小説作家が用いた小説形式では歴史的事実として描写しきれない社会の状況に直面していたのである。

注

- 1) Louis Cazamian, *Le Roman social en Angleterre*, trans. Martin Fido, *The Social Novel in England 1830-1850* (1903; London: Routledge and Kegan Paul, 1973). Raymond Williams は George Eliot の *Felix Holt, the Radical* (1866) までを含めて 'the industrial novels' と呼び, 'an interesting group of novels, written at the middle of the century, which not only provide some of the most vivid descriptions of life in an unsettled industrial society, but also illustrate certain common assumptions within which the direct response was undertaken.' と定義している。Raymond Williams, *Culture and Society* (1958; London: Hogarth Press, 1990), p. 87.
- 2) J. S. Stone, *George Meredith's Politics: As Seen in His Life, Friendships, and Works* (Port Credit, Ontario: P. D. Meany, 1986), p. 12.
- 3) John Halperin, "Introduction", George Meredith, *The Ordeal of Richard Feverel*, ed. John Halperin (Oxford: Oxford University

- Press, 1984), p. x.
- 4) George Meredith, *The Ordeal of Richard Feverel*, (London: Constable, 1909), *The Works of George Meredith*, vol. 2, p. 499. 以下 *The Ordeal of Richard Feverel* からの引用はすべてこの版による。
 - 5) George Meredith, *The Letters of George Meredith*, ed. C. L. Cline (Oxford: Oxford University Press, 1970), p. 32.
 - 6) 小説執筆の数年前, Meredith は生物の品種交配と遺伝に関して学問的興味を持ち, Frederick Crace に手紙で質問している。 *Letters*, p. 25.
 - 7) Tess Cosslett, *The 'Scientific Movement' and Victorian Literature* (Sussex: Harvester Press, 1982), p. 14.
 - 8) Mohammad Shaheen, *George Meredith: A Reappraisal of the Novels* (London: Macmillan, 1981), p. 19.
 - 9) John Goode, 'The Egoist: Anatomy or Striptease', *Meredith Now: Some Critical Essays*, ed. Ian Fletcher (London: Routledge and Kegan Paul, 1971), p. 209.
 - 10) Meredith による 'comic perception' の定義は, 'You may estimate your capacity for Comic perception by being able to detect the ridicule of them you love, without loving them less: and more by being able to see yourself somewhat ridiculous in dear eyes, and accepting the correction their image of you proposes'. George Meredith, *On the Idea of Comedy and of the Uses of the Comic Spirit*, (1897; London: Constable, 1910), *The Works of George Meredith*, vol. 23, p. 41.
 - 11) V. S. Pritchett, *George Meredith and English Comedy*, (London: Chatto and Windus, 1970), p. 66. 'Meredith is above all a novelist of youth and growth; for he accepts with pleasure the conceit, the severity, the aggressiveness and selfencumberedness of young men and women, the uncritical impulses and solemn ambitions'.
 - 12) Gillian Beer, *Meredith: A Change of Masks* (London: Athlone Press, 1970), p. 15.
 - 13) William Cobbett, *Weekly Register*. 30 March 779. 1822. Raymond Williams, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society* (1976; New York: Oxford University Press, 1983), 'Radical'の項参照。
 - 14) Jerome Buckley は *Season of Youth* の中でこの場面を 'epiphany' として論じている。 Jerome Buckley, *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding* (Cambridge, Massachusetts:

Harvard University Press, 1974), p. 80.

- 15) Norman Kelvin, *A Troubled Eden: Nature and Society in the Works of George Meredith* (Stanford, California: Stanford University Press, 1961), p. 11.